

Spicker, P., 2011, "Generalisation and Phronesis: Rethinking the Methodology of Social Policy," *Journal of Social Policy*, 40: 1-19.

（P. スピッカー，2011，「一般化とフロネシス——社会政策の方法論を再考する」）

社会政策と応用社会科学（pp1-2）

- 社会政策は、通例、応用社会科学の一形態として理解される。
 - 社会政策は、概念や知見を取捨選択して応用するだけでなく、社会科学の諸分野における原理や方法論、思考のパターンなどを活用している。
- 本論文は、社会科学の一構成要素であり、政策研究にとっても重要な、一般化の原則に焦点を当てる。
 - 社会政策研究はしばしば「何が有効か（What works?）」や「それはほかの場所でも可能か」といった問いに関心を寄せるが、一般化のプロセスには問題がつかまとう。
 - 以下、いくつかの論点を吟味したうえで、一般化の困難を避けうる他のパラダイムを素描する。

一般化のアプローチ（pp2-3）

- 一般化のプロセスはいくつかのやり方で理解されている。
 - 1) 理論の構築と検証：理論的なモデルにもとづき、そこから示唆される関係性（relationships）を確認したり否定したりする作業。
 - 2) 観察された事象の規則的で一貫した関係性：統計データを用いた観察から始めて、そこに見られた連関（associations）に基底的な関係性を帰属させる。
 - 3) 实在論：実際にある関係性を説明する基底的なメカニズムを暴露しようとする。
- これら異なるアプローチの共通点は、知っていることの要素を並べて、そこから他の文脈でも用いることのできる諸要素の関係を取り出してみせること。

帰納法（pp3-4）

- 諸要素の関係性についての一般化の理論的根拠は、通常、帰納法あるいは原因と結果にあるとされる。
- 帰納法は実際のところ、幅広いアプローチをそのうちに含む。
 - 例：政策エビデンスのレビュー、ひとまとまりの事象の記述・分類、統計分析。
 - これらのアプローチはいずれも、データを選り分けて並び替えることで、（諸要素の）並置の発生と再発のパターンを確立することを活動の核心としている。

- 連関を識別し、そこから一般化するプロセスは、社会科学の重要な一部であり、帰納法の考えを復権させようとする論者もいる。
 - 多くの場合、帰納法が行っているのは、他の文脈における関係性を一般化することを可能にするプロセスやメカニズム、あるいは因果関係と矛盾しない証拠を集めること。

因果的説明（pp4-8）

- 因果的説明の連続体：
 - 1) A が存在することが、B が存在することにとって必要かつ十分であれば、A は B の原因である。：社会科学の問題に文字通り適用することはほぼ不可能。
 - 2) 事象 A が事象 B を生成するメカニズムの根本であれば、A は B の原因である。
 - 3) X が存在することで Y が発生する見込みがあれば、X は Y の原因である。
 - 4) ナラティブとしての因果関係という見方。原因の特定は逐次的な記述の構築に依存するとみなす。

因果分析の諸問題

- 社会政策において因果分析に伴うもっとも明白な問題は、それが困難であるということ。
 - 社会政策の歴史は、原因についての疑わしい主張の数々で彩られている（例：遺伝的体質が社会問題の根本である、母親の怠慢が少年非行の原因である、福祉供給が貧困と怠惰を招く、など）。
 - ランダム化比較試験などの手続きは、原則として、社会環境の効果から区別して、政策介入がどのような効果をもたらすか識別することを可能にするが、社会現象を社会環境から分離することはできない。
- 原因を説明することが政策に有用な処方箋を指し示すのであれば、社会学者が因果関係の考えにしがみつくのも理解できるが、そうしたことはめったにない。
 - しばしば最良の社会科学は、そこからの一般化が困難であるほど限定されたもの。
 - 例：第二次世界大戦がイギリスにおける福祉国家の発展を可能にする条件をつくり出したとする Titmuss¹の議論は、過去の特定の事象を理解するうえで価値あるものだが、必ずしも一般化の基礎を提供していないし、その条件がいかんして再現されうるかや、政府が何をなすべきかの説明もしてしない。
 - 明らかに否定しがたい因果的説明があったとしても、そこから結果として何をすべきかを知ることができるとは限らない。

¹ R. M. Titmuss, 1950, *Problems of Social Policy*, London: HMSO/Longmans Green.

一般化の代替案（pp8-10）

- 一般化の代替案：
 - 1) 懐疑論的なプラグマティズム（sceptical pragmatism）：一般的なルールは存在せず先例のみがあると考え、理論的モデルに依拠せずに実際により効果を生み出すものに焦点を当てる見方。しかし、これは絶え間ない監視と頻繁な評価を必要とし、時間がかかるという問題あり。
 - 2) 「ポスト実証主義」：極端な相対主義は経験的な社会科学の可能性を否定している点で問題あり。

異なるアプローチに向けて

- 学問分野としての社会政策にとっての課題は、実際の政策上の要求に対処できる応用社会科学のアプローチをどのようにして開発することが可能かを問うことであり、一般化それ自体ではない。（p10）
 - 政策研究は何らかの教訓を導くことが必要であるとすれば、ここでなすべきことは、われわれがどのような教訓を導こうとしているのかを再考することである。

フロネシス（pp10-17）

- 社会科学における異なる種類の知識としてのフロネシス（Phronesis）。
 - アリストテレスの用語で、実践的な知を指す。
 - 一般化された科学的な知（episteme）やモノをつくるのに必要な知（techne）と異なり、含意を理解したり正しい選択をしたりすることに関わる。
 - 理論的な言明ではなく、一般化された観察。何が起きたかの説明ではなく、そのおおよその記述。体系化された命題ではなく、経験則。行動の指針（precept）のようなもの。
- 社会政策研究におけるフロネティックな教訓の例：
 - 選別的な社会政策は、それを届けようと企図した人びとに届けることができない。民間部門ではコストを制限するために逆選択が生じる。等々。

フロネシス：競合する解釈

- フロネシスの概念の主要な理解の仕方：
 - 1) 合理主義的理解：原理や教訓は討議をつうじて実践に翻訳されるとみなす。
 - 2) 道徳的理解：フロネティックな判断は規範的・道徳的性格をもつとする。フロネシスは政策研究と同様、価値判断に満たされている。

- 3) 状況依存的な理解：決定の状況依存的な文脈を強調。フロネシスを経験的、即時的、具体的、個人的なものとする。
- いずれの理解においても、フロネシスは行為に関わる。これがフロネシスの概念を社会政策に適したものとしている。

フロネティックな一般化

- フロネシスは一般化することが可能だが、それは理論的な関係性についての一般化ではなく、何が生じたかという経験についての一般化。
- フロネティックな一般化のいくつかの特徴：
 - 1) 原因は明確なものである一方、フロネシスはおおまかなものである。フロネシスは行動を導くことに関わるものであり、たんに真偽が判定される言明に関するものではない。
 - 2) 因果分析は普遍的なものである一方、フロネシスは個別的なものである。原因は基底的なメカニズムを言い表すが、フロネティックな一般化は必然的にその文脈に依存する。
 - 3) 因果的な一般化は、重要な核心を見るために情報を切り取る一方、フロネティックな一般化は不都合な情報を排除することなく、異なる情報源から得られた経験の相互参照（または三角測量）にもとづく²。

フロネシスと方法

- フロネシスはすべての答えであるというわけではない。
 - フロネシスは、一般化された科学的知がなければ、プラグマティズムと同様に保守主義の影響を受けやすく、既存の慣習などに縛られたものとなる。また、その一般化は検証することも反証することも困難。
 - フロネシスは episteme や techne の代用物ではないが、それらの重要な対抗勢力（counterbalance）である。
- 社会政策では、不確実性や曖昧さ、取り扱う素材がもつ政治的性格に対してますます寛容になる傾向にあり、研究者たちは非専門家から得られる多様な証拠の正当性を示そうとしている。
 - 私たちが用いる方法の多くは行為と経験にもとづいており、方法論はそれに追いつく必要がある。本論文はそうしたプロジェクトへの貢献を企図している。

² このようなフロネティックな一般化の例証として、著者はグラウンデッドセオリーアプローチを挙げ、B. Glaser と A. Strauss の著作を参照している。B. Glaser and A. Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory*, Harthorne, NY: Aldine de Gruyter.